

難民 REFUGEES

1999年第3号 (通巻115号)

岐路に立つアフリカ

30周年を迎えた
OAU難民条約



UNHCR

国際連合
難民高等弁務官
事務所

問い直される条約の価値

30年前、アフリカ各国の代表者たちが、エチオピアの首都アジスアベバに集まった。大陸全土で急拡大しはじめた難民危機に、初めて協力して取り組もうとしたのだ。

故ハイレ・セラシエ皇帝が作った壮麗な宮殿の「アフリカの間」。この会合にふさわしい名前の広間で、アフリカ統一機構(OAU)の34か国が、「アフリカにおける難民問題の特殊な側面を規定するアフリカ統一機構条約」(OAU難民条約)を採択した。

現在46か国が加盟する同条約は、とりわけ寛容な内容で、意図的な迫害を逃れてきた人だけでなく、外部からの侵略、占領、外国の支配または、著しい社会的混乱を逃れてきた人々(大規模な集団を含む)にも保護の手を広げた。

がある。「対象者」の保護にあたっては、法律学者が「ソフトロー」(伝統的に国際法上の効力を否定されてきた国際文書)と呼ぶ道徳的権威を拠り所しているのだ。しかし善悪の見境がない政府はもちろんのこと、もっとも文明の進んだ国の政府まで、国益を守るために条約の内容を曲げたり、正反対の発言をする。こうした条約が、わずかでも成果を収めてきたというだけで驚きだ、という皮肉な声も聞こえてきそうだ。

現在、道徳的権威と法的保護は、これまでにない大きな困難に直面している。多くの人道危機の原因は、変化し、複雑さを増してきた。たとえゆるやかでも、条約が拘束するのは国家だけで、紛争の多くにかかわっている反政府勢力(シエラレオネの革命統一戦線など)に対する拘束力はなく、彼らは手足切断や復讐といった蛮行の限りをつくしている。

難民ならば、ある程度の国際的保護を受けられる。しかし故郷を追われた人々の多くを占めるようになってきた国内避難民は、もっと弱い立場におかれる。一般的な人権法が適用されるとはいえ、それさえも完全に無視する政府は多い。しかも最近まで、各国の政府や機関は、他国の国内問題にかかわりたがらなかった。その意味では、先頃のコソボ紛争への対応は大きな転換点になるかもしれない。

21世紀を目前に控え、各国は既存の条約すべてに対する取り組みを強化し、難民と国内避難民を同じように保護しなければならない。その一方で、OAU難民条約が明らかな欠陥と改善の必要性をかかえながらも、多くのアフリカ人を保護し、生活再建を助けてきた事実は、今後の励みになる。



アフリカ難民の窮状を話し合う国際会議(ジュネーブ)

OAU難民条約のほかにも、難民など世界の虐げられた人々の支援を目的とし、いま大きな節目を迎えようとしている国際条約は多い。今年は「子どもの権利条約」が10周年、「戦時における文民の保護に関するジュネーブ条約」が50周年を迎える。来年はUNHCRも設立50周年で、2001年には「難民の地位に関する条約」が50周年になる。

これらの条約には、それぞれ共通する強味と弱味



編集者：Ray Wilkinson
寄稿者：Judith Kumin, Vincent Parker,
Paul Stromberg, Peter Kessler,
Khasim Diagne

編集アシスタント：Virginia Zekrya
写真部：Anneliese Hollmann,
Anne Kellner

デザイン：WB Associés - Paris
制作：Françoise Peyroux
総務：Anne-Marie Le Galliard
配本・発送：John O'Connor, Frédéric Tissot
地図・衛星画像：UNHCR - Mapping Unit

日本版
翻訳協力：藤原 朝子、佐藤 綾子
編集・総務：日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、かならずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権©表示のないものの転載・複写には許可が要りません。また©表示のない写真は、事前に承諾を求めた出版の目的に限り使用を認めます。

本誌の日本語版制作協力：(株)イソラコミュニケーションズ(東京)、英語版および仏語版制作協力：ATARSa(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ20万6000部。

発行：UNHCR日本・韓国地域事務所
〒107-0052 東京都港区赤坂
8-4-14
TEL 03-3475-1615
FAX 03-3475-1647
ホームページ
<http://www.unhcr.or.jp>
郵便振替 口座番号
：00130-4-59734
加入者名：UNHCR
業務時間：月曜～金曜日
9:30～17:30
(昼休み12:30～13:30)
日本語版発行：1999年10月

表紙：アフリカ難民の30年。
PHOTOS: UNHCR / T. BÖLSTAD;
UNHCR / R. CHALASANI; UNHCR / B. PRESS

UNHCR ジュネーブ本部
P.O. Box 2500
1211 Geneva 2, Switzerland
www.unhcr.ch

難民 REFUGEES

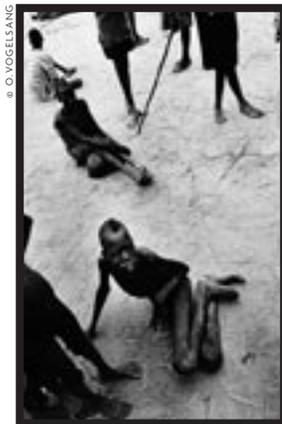
1999年 第3号 (通巻 115号)



4 「アフリカの角」では1970年代後半に内戦が起き、おびただしい数の避難民が出た（写真はスーダンのエチオピア難民）



21 難民の大半は、虐待や暴行に対して最も無防備な女性や子どもだ。



28 スーダン南部は、何十年も内戦と人災に苦しんでいる。

2 編集部から

条約は難民保護に役立っているのか？

4 特集

OUA難民条約の締結から30年：変化の時が来たのか？

レイ・ウィルキンソン

年表：アフリカの主な難民危機

条約：もっと多くの人に腕を広げて

UNHCR：アフリカでつづく活動

14 インタビュー

ニエレレ元タンザニア大統領に聞く

16 地図

アフリカ難民問題の歴史を追う

18 アフリカ

最近の出来事を国別に紹介する

21 女性

危険と隣り合わせの難民女性

メアリー＝アン・フィッツジェラルド

24 フィールド職員

過酷な任務

25 難民

十代の少女の一日

26 Short Takes

世界からの短信

28 フォトエッセー

写真でみるスーダンの危機

30 People and Places

31 Quote Unquote

あれから30年

OAU難民条約は寛容性のモデルだったが、
時代は変わった。

レイ・ウィルキンソン

それはアフリカが興奮に満ち、希望に燃えていた時代だった。

1950年代後半、まずモロッコとガーナが独立して、植民地時代終えんの先鞭をつけた。10年後、アフリカ大陸全体が騒乱の渦に飲みこまれ、500年の歴史をもつポルトガルの植民地帝国も崩れはじめた。

だが、大きな問題もあった。旧支配者たちが権力の放棄を拒否した国（北はアルジェリアから南はアン▶

（6ページにつづく）



ベナコ・キャンプ
(タンザニア)で帰還
の準備をするルワン
ダ難民(1996年)



アフリカ難民条約の正式な採択前に、UNHCRとアフリカ統一機構（OAU）の合意に調印するサドルディン・アガカーン国連難民高等弁務官（1969年）

▶ ゴラやモザンビークまで）では、長期的な解放戦争が始まり、数万人、やがて数十万人が安全を求めて近隣諸国へと逃げ出した。それが現代のアフリカ難民の始まりだった。

難民たちは、兄弟姉妹のように暖かく迎えられた。数年後には、大部分が新たに独立した母国に帰ってゆき、指導者や実業家、農夫になると考えられていたのだ。ボツワナは一部の難民に市民権を与え、タンザニアは市民権だけでなく、

永住を決めた難民に農地まで与えた。

天然資源も豊富だった。難民たちは、地元民（民族的つながりがある場合が多い）と一緒に、あるいは定住地（難民キャンプができたのはもっと後のこと）で暮らし、庇護国の労働力を補う存在として歓迎された。

「無邪気な時代でした。難民も、指導者たちも」と振り返るのは、タンザニアのジュリアス・ニエレレ元大統領だ。「未来はとても明るくみえました。その

輝ける未来への道のりに、障害が待っているとは思いませんでした。」

陶酔の日々

ユスフ・ハッサン・アブディが、難民としてタンザニアに来たのは8歳のときだった。彼もまた、あのうっとりするような時代を思い出している。とくに感動的だったのは、ニエレレが、自分の唱える革命的な社会主義思想への支持を集めるため、ビクトリア湖付近の自宅が



© F. BERTRAND

らキリマンジャロ山の麓アルーシャまで行なった「長征」だ。

「私たちはニエレレを歓迎しようと、沿道に並びました」と、現在UNHCRの渉外担当官を務めるユスフは言う。「ニエレレは、貧困、無知、災害の三悪を追放しようと訴えました。衝撃的でしたよ。ムワム(スワヒリ語で「先生」の意味)は、私たちに話しかけようと振り返りました。私の名前を聞いたときは、天にもものぼる思いでした。私は何がなんだかわからな

くなって、モゴモゴつぶやいたものです。タンザニアは、私に尊厳と信念を取り戻させてくれました。」

難民の大部分は、独立戦争を逃れてきたのだが、すでに不安な未来の兆しがあった。独立したブルンジを最初に逃れてきた難民たちは、すでに移動を始めていた。当時、ニエレレなどアフリカの指導者たちは、これを「異例」の事態に過ぎないと考えた(インタビュー記事を参照)。

アフリカ統一機構(OAU)は、創設から6年後、故ハイレ・セラシエ皇帝のきらびやかな宮殿で、「1969年アフリカに

おける難民問題の特殊な側面を規定するアフリカ統一機構条約(OAU難民条約)を採択した。

同条約は、1951年のジュネーブ難民条約を手本にする一方、難民の定義をかなり広げた。ジュネーブ難民条約は、難民を「迫害を受ける恐れのある者」と定義しているが、OAU難民条約は、「外部からの侵略、占領、外国の支配、または著しい社会的混乱を逃れてきた者」と、より大きな集団も含めた。この定義は、後にモザンビークからルワンダにいたる広大な地域で起きた大規模な難民流出 ▶

アフリカの主な難民危機

1956

アルジェリア独立戦争で、数万人がチュニジアとモロッコに避難。現代アフリカ史上初の大規模な難民移動となった。UNHCRは1957年に援助に乗り出し、以後5年間でアルジェリア人26万人を支援。

1958

ギニアがフランスから独立。しかし旧宗主国との緊張が高まり、100万人が国外へ逃れて難民に。

1960

アフリカ中部と南部で反植民地運動が激化。両地域全般で大規模な人口移動が発生。

1962

UNHCRがブルンジに事務所を開設。サハラ以南の危機に対応するため、同地域初の事務所となる。

1966

アフリカ東部に広がるポルトガルの植民地、モザンビークで独立の気運が高まり、大量の人口流出が起きる。その後、やはりポルトガル植民地のアンゴラとギニアビサウでも政情が不安定に。

1969

大陸全土の難民急増にともない、アフリカ統一機構(OAU)が「アフリカにおける難民間

題の特殊な側面を規定するアフリカ統一機構条約」を採択。

1972

アフリカ全土で人口移動が活発化。UNHCRはスーダン南部出身の難民20万人の帰還を支援したが、ウガンダではアミン大統領がアジア人4万人を追放。ブルンジでは大量虐殺がはじまり、17万人が近隣諸国へ避難。

1975

国連が西サハラの自決権を認めるが、歴史的領有権を主張するモロッコは、自決権を主張するポリサリオ戦線と衝突。元イギリス植民地の南ローデシアから難民15万人がモザンビークへ避難。

1977

「アフリカの角」で戦闘が起き、ソマリア人とエチオピア人300万人が避難。UNHCRは、近隣諸国でエチオピア難民の援助計画を開始。

1984

エチオピア大飢饉。死者は数十万人にのぼり、これを上回る数の人々がスーダン、ソマリア、ジブチに避難。

1989

国連が仲介した政治的和解で、南アフリカのナミビア支配が終わり、ナミビア人4万5000人が帰還。一方、リベリ

ア内戦が起き、以後7年間に70万人が避難。

1990

ネルソン・マンデラ氏が釈放され、アパルトヘイト(人種隔離政策)に終止符の兆し。避難していた南アフリカ人多数が帰還を開始。

1992

モザンビーク包括和平協定が調印され、難民170万人が帰還。第二次大戦後に実施された難民帰還・再定着プログラムとしては最大の成功を収めた。

1994

ルワンダのジェノサイド(民族大量虐殺)で100万人が死亡、170万人が国外へ避難。2年後に数十万人がルワンダ帰還を果たすが、多数がアフリカ中部の熱帯雨林のなかで命を落とした。

1997

シエラレオネの軍事クーデターをきっかけに、虐殺や手足切断が続発。40万人以上が避難した。

1999

21世紀を目前に控え、アフリカ全土では、難民をはじめUNHCRが対象とする700万人以上が今も故郷を追われている。



多くの難民が命を落とした（写真はスーダンのキャンプで死んだエチオピア難民の母子）

▶ で、とりわけ重要になった。

自発的帰還の原則

OAU難民条約は、現在世界的に受け入れられている「自発的帰還の原則」を初めて取りこんだ国際条約でもある。これは中米諸国の難民を対象とした1984年の「カタルヘナ宣言」にも影響を与えた。

なによりOAU難民条約には、未来に対するアフリカの自信が現われていた。条文の多くは、「難民問題」は対処可能

で、比較的短期間に解決できるという自信を示していた。

当時のエチオピア・ヘラルド紙は、「現在アフリカには計100万人の難民がいる」が、新条約は「アフリカ難民の苦悩をやらせ、アフリカ内部の協力を促す画期的な節目になる」と指摘していた。

しかし現在、アフリカではOAU難民条約の締結以来もっとも戦争と内戦が拡大し、難民をはじめUNHCRが援助対象とする避難民は720万人に達する。

もはや問題は一時的なものではなく、事実上手に負えない状況となり、「アフリカ難民危機」のあらゆる側面が大きく変わった。難民を生み出す主な原因も、独立戦争ではなく、激しい内戦やゲリラ闘争の場合が多い。「人道的」な難民支援は、元の面影もないほど政治的・軍事的な色合いが強くなった。難民が客人としてもてなされることは少なくなり、各国は国境を閉ざすようになった。

難民自身も変化した。避難場所をみつ

もっと多くの人に腕を広げて

ポルトガルの植民地帝国が崩壊し、アフリカ全土で難民が急増していた1969年、アフリカ統一機構(OAU)の加盟34か国は「アフリカにおける難民問題の特殊な側面を規定するアフリカ統一機構条約」(OAU難民条約)に調印すべく、エチオピアの首都アジスアベバに集まった。

OAU難民条約は、1951年の「難民の地位に関する条約」と1967年の同議定書をもとにしていたが、大集団が一度に移動するアフリカ特有の事情を考慮し、保護範囲を大幅に拡大した。

1951年難民条約は、難民を「人種、宗教、国籍、もしくは特定の社会集団の構成員であることを理由に迫害を受ける恐れがあつて母国を逃れてきた者で、さらなる迫害への恐れから帰国できない、または帰国を望まない者」と定義している。

しかしOAU難民条約では、自国または国籍国の「外部からの侵略、占領、外国の

支配、または著しい社会的混乱」を逃れてきた人も保護対象に含まれる。

難民の地位は、個人だけでなく集団単位でも与えられる。これはモザンビーク、アフリカの角、ルワンダその他の地域から大量の避難民が出たとき、重要な意味をもった。

OAU難民条約は、現在世界的に受け入れられている、自発的帰還の原則を盛り込んだ最初の条約でもある。1984年に中米諸国が調印した「カルタヘナ宣言」も、同条約を手本にしている。

OAU難民条約は、1974年6月20日に施行され、現在までに46か国が調印・加入している。その後、6月20日は「アフリカ難民デー」と定められ、難民と、難民を助ける活動のために、将来も難民援助に継続的に取り組むことを世界各国に思い起こさせる記念日になった。

変化のとき

こうしたなか、政府や関連団体の多くは、その役割を厳しく見つめ直し、難民問題の変化を受け入れる時期に来ているのではないか。30年前に作られたOAU難民条約自体も、現状を反映すべく改正と「更新」の必要があるのではないかと、専門家たちはそう考えはじめている。

1960年代後半の総じてバラ色のシナリオでは、ブルンジ難民の発生は「異例の」事態だったが、変化の兆しは続いた。現在ロンドンの大学で教鞭をとるエリトリア人ガイム・キブレアブは、難民が増えてきた1970年代に、彼らをキャンプに入れるべきか否かをめぐり、激しい議論が交わされたのを憶えている。

「多くの政府は、キャンプのほうが地元住民や経済に与える影響が小さく、難民との天然資源の奪い合いもなくなり、

キャンプの運営と費用は国際社会がもってくれようと考えていました」とキブレアブは言う。

しかしこれは間違いだった、と彼は断言する。当時から難民を地元住民に溶け込ませたほうが良かったし、実現性も高く、効率も良く、人道にかなっていたというのだ。だが、「キャンプ」を作るというアイデアは、幅広く受け入れられた。

人権擁護団体「アフリカン・ライツ」を率いるラキヤ・オマールによれば、難民の大規模な政治化と軍事化は、1990年代前半の「アフリカの角」(大陸北東部のソマリアを中心とする地域)で起きた。エチオピア難民

は訓練を受けて武装化させられ、ソマリアが分裂したとき、ソマリア市民への発砲を強いられた。援助食糧が輸送途中で武装グループの略奪にあうのも日常茶飯事だった。

そして難民にかかわる根本的問題の ▶

「無邪気な時代でした。難民も、指導者たちも。」

けたり、緊急食糧配給や住居を獲得するうえで、より賢く、場合によっては「ずるく」さえなってきた。同時に、女性や子どもなどの最弱者たちが、略奪者の標的になった。ハイテク機器が使われ、援助計画には莫大な資金が投じられるようになったが、人道機関の職員も脅迫や殺人の対象になっている。また、世界的なメディアや非政府組織(NGO)といった新たな活動主体が、緊急事態のなかで重要な役割を占めるようになった。

▶ すべてが、1994年に起きたルワンダでのジェノサイド（民族大量虐殺）と、それに続く難民約200万人の流出で噴き出した。「アフリカ大湖地域の危機で、あらゆる問題がすべて表面化した」とオマールは言う。彼は、この惨劇で下された多くの人道的判断を公然と批判する。「もちろん惨劇の芽は以前からありました。けれどもジェノサイドを引き金に、それがものすごい勢いで吹き出したのです。」

得られた教訓

アフリカ大湖地域で起きた事件は、まだその上に影を落とし、反省のプロセスは今も続いている。タンザニア大統領の座を退いた後、長老政治家として活躍するニエレレも、いまだに事件の強烈さに圧倒されるという。「あの事件から何を学んでい

けるのか、まだ私には分かりません」と、彼は語る。

当時の援助活動が直面した多くのジレンマと、その対処方法に

ついては、専門家の意見も分かれる。難民と武装ゲリラの分離問題もそのひとつだ。分離のための介入を国際社会が拒否した後、明らかに虐殺の当事者と目される人物がまじっていたザイル東部の大規模キャンプには、食糧援助が続けられたが、その是非も問われている。

緒方貞子 国連難民高等弁務官は、UNHCRには罪のない人々に食糧を与え支援する義務があると繰り返し訴え、虐殺の当事者を引き離すよう国連安全保障理事会に促してきた。

ラキヤ・オマールは言う。ルワンダから人々が流出しはじめたとき、人道機関が人命救助に乗り出したのは当然だ。しかしいったん事態が安定したら、UNHCRなどの機関は現状打破に取り組むべきだったし、国際社会に働きかけ

るべきだった。「こうした状況は、これからも繰り返し起きるでしょう」とオマールは言う。そして実際、同じように手に負えない危機が、アフリカ西部の国シエラレオネで起きていることを指摘した。

ニエレレは将来、人道機関がはつきり「ノー」と言わざるをえない危機が起きるだろうと言う。「安保理が何の手も打たないなら、UNHCRなどの人道機関は、きっぱり『われわれは手を引く』と言って、撤退の理由を世界に知らせるべきです。」

アフリカ大湖地域の危機は、これまで当然視されてきた原則を打ち砕くと同時に、その一部がとうに消滅していた現実をはっきりさせた。

スパイと犠牲者

UNHCRのフィールド職員や他の機関の職員たちは、これまで紛争の周辺地帯で活動し、どの陣営からも苦しむ人々の味方とみられて

きた。それが今では、物理的に耐えがたい環境下で活動している。スパイだと疑われて虐待され、毎日生きるか死ぬかの判断を迫られる。危機のなかで殺害されたり、殉職したり、行方不明になったUNHCR職員は36人にのぼる。

援助活動が、はからずも一部の難民の命を奪ってしまうこともある。それは苦境にある人々を助けに行った者にとって、何よりつらい。たとえばキサンガ二付近では、熱帯雨林に隠れていた難民たちが食糧と住居を求めて援助キャンプまで出てきたところ、待ち受けていた武装兵に殺されてしまった。その経験から「いまだに自分がクズで、最低の人間に思える」と、あるフィールド職員は言う。「人々を助けに行ったのに、殺人に手を貸してしまったのです。」

キサンガ二近郊では、伝統的に守られ

てきたもうひとつの「善良な」難民活動も失われた。OAU難民条約に国際条約として初めて盛り込まれた、自発的帰還の原則である。

避難民たちは、熱帯雨林のなかでほぼ確実に死ぬか、不確実な未来の待つルワンダに帰還するか、厳しい選択を迫られた。UNHCRは帰還を促した。避難先に残るのも帰還するのも同じくらい危険なら、帰還したほうがいいと考えたのだ。しかしこれには、難民の保護というUNHCRの任務放棄だという批判もある。

ロンドン経済大学法学部のググレルノ・

OAU難民条約には、
未来に対する
アフリカの自信が
あらわれていた。



UNHCR/TAYLOR

ベルディラメは、UNHCRのジレンマに同情しつつ、こう語る。「現実の壁に直面して、いちど保護基準を下げてしまうと、非常に危険な道をたどり始める。」

判断を急いで

テレビに映し出される荒涼とした風景が、エチオピア飢饉を初めて世界に伝え、衝撃を与えたのは1984年のこと。そして1991年、国際機関はマスコミに背中を押されてソマリアに介入。1994年頃には、マスコミは事件を中立的に報じるのではなく、むしろ危機を進展させてい

る、と多くの人々が指摘するようになった。

「30人ほどの人間(外国報道機関のアフリカ特派員たち)が、6億人が直面する問題に影響を及ぼす場所は世界中のどこを探しても、他にない」と、英フィナンシャル・タイムズ紙のアフリカ担当編集委員マイケル・ホルマンは言う。

衛星通信による情報伝達の加速化で、「少ない情報をもとに、速断を下す傾向がますます強くなってきた」とホルマンは言う。こうした急ごしらえの、表面的で不正確なことも多いニュースは、危機が起きている場所にも伝わる。そして援助▶

移動する難民たち

難民の出身国 上位6か国

シエラレオネ	45万人
ソマリア	41万9000人
スーダン	37万4000人
エリトリア	32万人
ブルンジ	30万人
アンゴラ	25万5000人

難民の受入国 上位4か国

ギニア	47万人
スーダン	39万人
タンザニア	35万人
エチオピア	31万7000人

ジンバブエから故郷に向かうモザンビーク難民(1994年)



▶ 職員やイラついたゲリラ、政府は、生死を左右する問題に性急な決断を下すのだ。

「旧ザイル東部では、ゲリラが拠出国、援助機関、ジャーナリストをあや

つった」とホルマン。「一方、援助機関やNGOもジャーナリストをあやつり、ジャーナリストは面白そうなネタをかぎまわっていました。様々な利害が、これまでになく絡み合っていたのです。」

ガム・キブレアブとホルマンによれば、他にも懸念はある。近年、西側諸国はアフリカから着実に撤退しており、その空白を埋めるかたちで、NGOが難民政策と政府計画の作成に過度に関与しているというのだ。

しかし何より皮肉なのは、民主主義の拡大が難民援助を(少なくとも短期的には)困難にしていることだ。ある指導者は、民主主義への移行前に国家の全権力を握っていたときは、難民問題について決定を下すのは簡単だったし、誰も口をはさまなかったと打ち明ける。

「人々を助けに
行ったのに、
殺人に手を貸して
しまったのです。」

いまや政治家たちは権力闘争にのみこみ、天然資源は減り、地元社会の声は高まって、意思決定は複雑で時間がかかるようになった。明るい側面があるとすれば、民主的手続きの拡大

で、長期的には難民を生む不安定な状況がなくなりうることだろう。

21世紀を前に

OUA難民条約に収められた原則は、21世紀も通用するのか。それとも変更の必要があるのか。ニエレレは、30年前の門戸開放政策(事実上、避難民全員に庇護が与えられた)は、現在も通用すると考えている。多くの政治家や人道問題の専門家の考えに反して、ニエレレは言う。タンザニアなどの国には広大な土地があり、いわゆる“経済難民”を含め、入国者すべてを歓迎できるし、誰ひとり追い返されるべきではない。

ガム・キブレアブの考えは正反対だ。彼は、OUA難民条約は内容を厳しくして、集団ではなく個人に焦点を移すべきだ

という。「われわれはいまや、極めて敵意に満ちた政治情勢のなかで、寛容な条約をもっているのです」とキブレアブ。「庇護は水と同じくらい乏しい資源になりました。全員を保護しようとすれば、誰をも保護できずに終わってしまうでしょう。」

だから、大規模な人口流出が起きた時は、すぐに全員に避難場所を与えるのではなく、庇護希望者ごとの事情を重視すべきだ、とキブレアブは言う。しかし現在のアフリカには、こうした変更や、新たな手続きを確立する余裕がある国はほとんどない。弁護士や役人に研修を受けさせるにも莫大な費用がかかる。

幅広い合意を得ている点がひとつだけある。アフリカ諸国の政治・社会・軍事的に不安定に終止符を打つには、長期的な経済開発が大きなカギであり、それが大部分の難民危機の原因を防止できることだ。ホルマンによれば、5年前なら笑い飛ばされたに違いないが、いまや世界の富裕国による対アフリカ諸国の債務免除が現実になりつつある。難民危機に対応するには、これと同じく

隣国ギニアに身を寄せるシエラレオネ難民。





1990年代後半、マリ難民はブルキナファソとモーリシャスから帰還を果たした。

らい大きな改革が必要だ。

しかし当面は、政治情勢が改革を阻みそうだ。各国政府は、ルワンダ難民の大量流出などの緊急事態に数十億ドルを投じ、テレビ番組を通じて宣伝効果をあげてきた。しかしあまり知られず、大衆の目をひきつけない事案に同規模の資金を拠出することには、多くの国が拒否反応を示してきた。

過去30年間には、めざましい成功もあった。OAU難民条約に示されるアフリカの寛容性は、文字通り数百万人に一時的な安全を確保し、生活再建のために息をつく場所を与えた。1990年のナミビア独立は、帰還した難民によって確固たるものになった。90年代の推定170万人のモザンビーク難民の帰還・再定住は、この30年間で最大の成功だ。

しかし戦災、政治、経済、社会の不安は、大陸全土に傷を残した。UNHCRが活動の対象とする難民など計720万人の他にも、同じくらい危機的状況にありながら、国際的な法的保護も援助も受けられない国内避難民は数百万人い

るといわれる。UNHCRは、1950年代半ばに大陸北部で細々とアフリカでの活動を始めたが、現在は42か国に110を超える事務所をもち、国際職員の40%以上がアフリカ大陸で活動している。こ

れは事態の深刻さを物語っている。

新たな世紀に向けて、アフリカには厳しい未来が待ち受けている。■

UNHCRの活動はつづく

1953年、UNHCRはアフリカ初の事務所をエジプトの首都カイロに開設した。UNHCR自身の創設から2年後のことだ。

3年後には、チュニジアでも活動を開始。アルジェリア解放戦争を逃れてきた25万人以上の援助に乗り出した。

紛争が拡大し、アフリカ全土で難民が増えるなか、UNHCRは次々発生する危機の後を追った。1962年には、サハラ以南初の事務所をブルンジに開設した。

現在は、42か国に110以上の事務所があり、2000人以上の職員（世界のUNHCR職員の約40%）が活動している。そして難民など推定720万人を支援している。

UNHCRは、1990年代半ばにアフリカ大湖地域でおきた、被災民数百万人という

大規模な危機から、十数人程度の小集団まで、さまざまな緊急活動に携わっている。

UNHCRの中心的な任務は、食糧、医薬品、避難所の提供をはじめとする緊急援助、撤退、そして難民保護である。

過去30年で、活動はますます複雑になり、高度な技術が必要になり、危険も増した。

紛争の「最前線」、あるいはその背後で活動するフィールド職員は、脅迫され、場合によっては避難を強いられた。アフリカ大湖地域の危機だけで、36人ものUNHCR職員が、殺害されたか、想像を絶する活動環境のなかで命を落としたか、行方不明になっている。

アフリカの寛容性は 維持しなければ...

タンザニアのジュリアス・ニエレレ元大統領は、アフリカ諸国の難民援助基準づくりに多大な影響を与えてきた。そして過去30年で環境は変わったが、門戸開放政策は維持すべきだと力説する。

複雑な現在と比べると、OAU難民条約が作られた1960年代後半は、アフリカ難民にとって、無邪気な希望の時代に思えますが。

ニエレレ：難民だけではありません。アフリカの指導者たちは未来を非常に楽観していて、困難にぶつかるとは思っていませんでした。難民の大部分は、植民地支配に抵抗しているアフリカ南部諸国の出身者でした。ブルンジなど独立国からの難民もいましたが、それは異例だと考えていたのです。

当時、アフリカの難民問題は一時的なものという認識があったのでしょうか。

ニエレレ：植民地支配が終わったのに、独立国から難民が出て混乱が起きるとは全く予想していませんでした。難民は被植民地国から来たのだから暖かく迎えよう、というのが私たちの考えだったのです。

タンザニアはとくに寛容で、難民に市民権と土地まで与えましたね。

ニエレレ：あれは植民地支配に対する戦いだったのです。難民はいつか出身国に帰ると思っていました。ところが彼らは何年も滞在し、外見も話し方もふつうのタンザニア人になりました。スワヒリ語で「難民」は「ワキンビジ」で、「彼らは逃げる」という意味です。私はこの言葉が好きではなかったので、「どうせならこの国の国民になったらどうだ？」と提案したわけです。

皮肉にも、タンザニアなどの民主化が、アフリカ大陸の寛容性を失わせてき



タンザニア元大統領のジュリアス・ニエレレ。

たようですが。

ニエレレ：難民を非難する声もあります。タンザニア人らしくないことを言い始めている。私たちは（民族という）イデオロギーを排除すべく努力してきました。ルワンダやブルンジを助ける前例を作るべきなのに、このイデオロギーを持ちこもうとする愚か者がいる。健康よりも、病気のほうが伝染しやすいのです。

過去30年で環境は大きく変わりました。いまアフリカ条約を作るとしたら、

何か変えますか。

ニエレレ：OAU自体の憲章を作るとしたら、答えはイエス。あれこれ変えたい部分があります。しかしOAU難民条約に関しては、変更すべき部分はないと思います。

しかし1990年代の変化を受け、同条約は寛容すぎるという声もありますが。

ニエレレ：寛容な条約が作られた背景には、（植民地の）境界線が人為的だったこともあります。ルワンダ出身者もブルンジ出身者も、ンガラ（タンザニア）では同

じ人々です。話す言葉も同じ。向こう(出身国)でトラブルに巻き込まれて、こちらにやってきただけなのに、「帰れ」と言う考えは気に入りません。なぜ彼らがここにいてはいけないのでしょうか？ たとえ経済難民だとしても、なぜ帰らなければいけないのでしょうか？ 国連やヨーロッパはこの考えを受け入れませんが、ルワンダなどからきた経済難民も、やはり受け入るべき難民なのです。

それは非現実的なユートピア思想ではありませんか。
ニエレレ：タンザニアには十分な土地がないと言う連中がいますね。ばかげた話です。タンザニアには土地がありあまっています。

他のアフリカ諸国や指導者たちも同じ考えなのでしょうか。

ニエレレ：そのはずです。ただ、問題はあります。たとえば現在、南アフリカには仕事を求める人が押し寄せていて、非常に大きな問題になっています。けれども私たちは、(OAU難民条約の)支柱となる精神を否定すべきではありません。

アフリカ諸国は、大湖地域などの大規模危機に対処できませんでしたが、今後は個人単位で難民の地位を与えていくべきなのでしょうか。

ニエレレ：個人単位だと、受け入れ国で手のかからない裕福な人のほうが歓迎されがちになるでしょう。でもタンザニアやコンゴのように土地が余っている国は、あまり質問をせずに、ルワンダやブルンジ出身者を受け入れてやるべきです。

1994年にルワンダで起きた事件は、アフリカにとって転換点なのでしょう。それとも長い間蓄積されてきた多くの問題が表面化しただけなのでしょうか。

ニエレレ：1994年は特別です。ジェノサイド(民族大量虐殺)は異例の事態でした。軍は人々を追い出し、空っぽの国を反政府勢力に明け渡しました。そして難民キャンプにもぐりこみ、民兵とともに

政府のように振る舞った。この異例の事態に私たちは驚き、「いったい何事だ」と戸惑いました。そこからどんな教訓を得られるのかは、まだ分かりません。

一般市民と殺人犯が混在したキャンプについて、また人道機関が撤退すべきだったか否かについて、大きな議論が交わさ



ウリヤンクル定住地(タンザニア)のブルンジ難民(1975年)

れてきましたが。

ニエレレ：ゴマ(旧ザイル)で起きたことは絶対に繰り返してはなりません。武装グループを難民から引き離すために必要な措置をとってほしい、と私たちは国際社会に働きかけたし、私自身も外交活動をしました。でも国際社会は動きませんでした。話し合いを続けただけです。だからルワンダは(キャンプの破壊を手助けするという)自衛策を余儀なくされたのです。

将来、国際社会の軍事的・政治的協力がなければならぬ理由に、人道機関が活動を拒否しなければならぬ事態が起きるのでしょうか。

ニエレレ：安全保障理事会などが間違っていると国際社会に理解させるには、それしか方法はありません。安保理が何の手も打たないなら、UNHCRなどの人道機関は「われわれは手を引く」と宣言して、撤退の理由を世界に知らしめるべきでしょう。

ゴマでは、殺人犯に食糧を与えることになっても、UNHCRは多くの無実の命を救うのだ主張しましたが。

ニエレレ：あれは人道問題というより安全保障の問題でした。

西側諸国は事実上アフリカから手を引き、その空白をNGOや国際機関が埋めていると指摘されますが。

ニエレレ：富裕国は、貧しい国の政府を信頼していないから、NGOを通じて対応したがるのです。この種の行為に私は本当に腹が立ちます。NGOは極度に力をもち、政府を無視するようになりました。NGOの活動には賛成できる部分もありますが、政府を無視するのは気に入りません。

国際社会は、ゴマ危機の最初の数週間に約20億ドルを投じました。多くの専門家は、同様の金額が長期的開発に向けられていれば、多くの難民危機は回避できたはずだと言

います。

ニエレレ：難民を生む根本的な原因は、経済です。マレーシアには様々な民族がありますが、経済が好調なときは民族間に緊張が生まれるという話を聞きません。ヨーロッパでも、経済状態の良い国では外国人排斥もあまりないでしょう。

しかし世界は、地味な開発プログラムに多額の資金を投じたがらないようですが。ニエレレ：政治的意思があれば出来ることです。国際社会の拠出金は開発援助に向けたほうが、惨劇が起きてから資金を投じるより、結果的には安あがりでしょう。何をすべきか国民を説得するのも、民主主義社会のリーダーの仕事です。

アフリカの未来を楽観していますか。
ニエレレ：友人・毛沢東のように答えなければいけない。つまり、長期的には楽観しなければなりません。短期的には楽観していません。私は債務軽減を話し合うため、ヨーロッパを訪問する予定です。あの債務がなければ、国庫の35%を節約して、学校や病院に振り向けられます。そうすれば民主主義にも大きな希望が生まれるでしょう。■

アフリカの足どり

モロッコ



1 アフリカ現代史で最初の大規模な難民は、1950年代のアルジェリア独立戦争で生まれた。数十万人が隣国チュニジアとモロッコに逃れ、大部分が数年間外国で暮らした。UNHCRは民間人を援助するため、カイロにアフリカ初の事務所を開

設した。以後数十年間で、難民の大部分を女性と子どもが占めるようになった。

UNHCR / S. WRIGHT

ウガンダ



2 危機はアルジェリア以南に拡大をつづけ、1960年代までに多くの人々がアフリカ南部の独立戦争、および中部のブルンジとルワンダの民族紛争から逃れた。ルワンダ人はウガンダに逃れ、最終的に定住。こうした難民の流れを受け、1962年、UNHCRはブルンジにサハラ以南初の事務所を開設した。

1

リベリア



10 過去30年間、UNHCRなどの機関は、女性や子どもなど最も無防備な人々を支援するため、特別計画を導入してきた。しかし皮肉にも、女性や子どもたちはこれまでになく脅威にさらされている。たと

えば写真のように、数万人の少年兵たちが戦闘集団に徴兵され、しばしば最も残虐な殺し屋に仕立て上げられる。

© G. BURTUNCOX

10

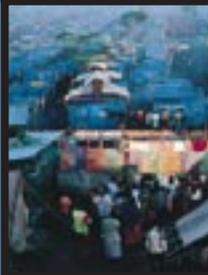
旧ザイール



9 難民危機が拡大し、事態が複雑になってくると、人道活動も高度になってきた。ザイール東部の町ゴマでは、1994年に世界最大の航空機(写真の旧ソ連製アントノフなど)を使って物資が空輸された。さらに人道機関職員たちは、航空機、最新の衛星通信設備、米国やフランスなどの軍物資補給システムを使って難民を支援した。

UNHCR / A. HOLLMANN

ブルンジ



8 1994年のルワンダでのジェノサイド(民族大量虐殺)とそれに続く約200万人の避難は、同国の現代史でもっとも悲惨で、もっともテレビ報道された危機となった。写真のルワンダ難民は、やはり軍事的・社会的混乱がつづくブルンジに逃れた。その後、数十万人が帰還したが、21世紀を目前にして、アフリカ中部は依然として不安定な状況にある。

UNHCR / A. HOLLMANN

6

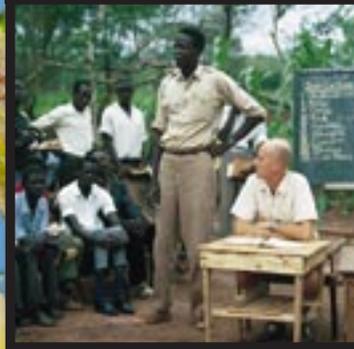
エチオピア



© F. BERTRAND

3 新たに独立した国々が、1963年にアフリカ統一機構（OAU）を結成。1969年には34か国がOAU難民条約を採択した。同条約は、幅広い難民を保護するきわめて寛容な内容で、以後30年間にアフリカ大陸全土で生まれた難民数百万人の援助に貢献した。

中央アフリカ共和国



UNHCR / S. WRIGHT

4 初期の難民援助計画は、ごく小規模で、さほど高度なものではなかった。最悪の危機でも、援助職員は数人だけで、空輸機や無線通信などの装備もないまま、中古車で広大な土地を走り回った。写真は、スーダン難民たちと農作物の収穫について話す援助職員。

ソマリア



© L. ASTROM

5 「アフリカの角」では、まず1970年代のエチオピア対ソマリアの戦争で荒廃が始まり、1980年代のエチオピア大飢饉で強烈な打撃を受けた。この飢饉は、今世紀最悪の天災のひとつで、死者は数十万人、避難民は数百万人にのぼった。写真のエチオピア難民は、1978年にソマリアに逃れた。

ナミビア



UNHCR / P. MAGURANE

6 混乱と苦しみは著しかったが、大きな成功もあった。帰国が可能になるまで近隣諸国で保護されたアフリカ人は数百万人。ナミビアでは、国連の仲介で南ア共和国の支配に終止符を打つ政治的和解が成立。写真の子どもを含むナミビア人4万5000人が故郷に帰った。その多くは、国の再建に大きく貢献した。

モザンビーク



UNHCR / S. PINTUS

7 モザンビークでは、政府と反政府ゲリラ勢力レナモの間で1992年に包括和平協定が調印され、長年にわたる内戦に終止符が打たれた。推定170万人が近隣諸国から帰還し、迅速に再定着。第二次大戦以来、最大の成功を収めた例に数えられる。写真はジンバブエからの帰還民。

世界で最も残酷な内戦

緒方高等弁務官の訪問で
注目が集まる西アフリカ問題

ポール・ストロンバーグ

きちんとした文字で書かれた死亡者リストが、コノート病院の石の壁に貼ってある。院内では、患者が物憂げに歩き回っている。無残に切り落とされた手足の傷口には、真っ白いガーゼと包帯が巻かれていて、訪問者の目を引く。

数週間前、病院の中庭は手足を切られた人で埋めつくされた。彼らは、歪んだシエラレオネ内戦の新たな犠牲者たちだ。「負傷者も、手足を切られた人も、ヤケドを負った人も、いまだに数え切れません」と言うのは、首都フリータウンの医師。「被災者はすでに2000人を越えており、まだ増え続けています。」

兵士たちは、
彼の息子を撃って
路上に
置き去りにした。

バン！バン！ある患者が叫ぶ。反政府勢力の兵士たちが息子を撃って路上に置き去りにして殺した挙げ句、彼自身の腕も切り落とした様子を語った。別の難民も、同じような体験を打ち明けた。反政府勢力は、大勢の捕虜を行進させて、ナタで3人を殺し、彼の左腕を切断。大統領に新しい腕をくれるよう頼むんだな、と言い捨てた。彼は10日間森を歩き続け、安全な場所にたどり着いた。

最近、緒方貞子高等弁務官がシエラレオネ、ギニア、リベリアを歴訪し、アフリカ西部のみならず大陸全体にとって最も悲惨で手に負えない問題に注目が集まった。

シエラレオネ内戦では、蛮行の限りが尽くされている。何万もの人々が殺され、

手足を切り落とされ、レイプされるなか、過去2年間で450万人の総人口のうち45万人が国外へ逃れた。

しかしシエラレオネ人の大規模流出が続けば、隣国ギニアも問題に直面する。ギニアは、アフリカで最大の難民47万人を庇護している。そしてかつて寛容だった他の国々と同じように、この負担にいつまでも耐えられないと公言しはじめた。

貧しいが、歓迎して

ギニアのランサナ・コンテ大統領と主要閣僚は、最近同国を訪問する人々に問題の大きさを訴えてきた。ギニアは世界最貧国のひとつだが、世界最大級の難民人口を抱えている。国民の間には、難民のほうが自分たちより良い医療、水、食糧援助を得ているという不満が広がっている。環境は破壊され、多くの難民が生活する国境地帯はシエラレオネ反政府勢力の越境攻撃を受け、ギニアの安全保障まで脅かされている。

緒方高等弁務官は、ギニア政府の苦境に理解を示した。UNHCRは、5万人を国境地帯から移動させるため、約400万ドルを拠出。難民帰還後に環境を回復する方法も研究している。緒方高等弁務官は、さらなる国際援助を訴えると約束したが、簡単ではなさそうだ。UNHCRの今年の活動資金は約2400万ドルだが、すでに深刻な資金不足に直面しているからだ。

ギニアはすでに、リベリア難民70万人の多くも庇護している。ただしリ

ベリア大統領選から2年がたち、多くは不安定な未来の待つ故郷に帰りはじめた。バアラ一時受け入れセンターで出発の準備をしていたグループは、自宅は破壊されているし、何が待ち受けているか分からないと漏らした。

「緊急援助から再建への真の移行がなければ、新たな生活を築くうえで、戦闘中と同じくらい大きな問題に直面するだろう」と緒方高等弁務官は言う。事実、比較的閉鎖的で安全な難民キャンプの生活から、「自立した」生活再建へ移る過程は、難民にとって最も厳しい時期だ。

それでもほとんどの人は、すすんで賭けに出る。厳しい未来が待つリベリアに帰る理由を聞かれて、バアラにいた女性は答えた。「我が家にまざる場所はありませんから。」■



UNHCR / P. STROMBERG

両腕を切断され、リハビリに励む被害者。

人間の価値が 大きく失われていく

アフリカの政府と社会は、やり方を変える必要がある。

ユスフ・ハッサン・アブディ

グラサ・マシエルの『武力紛争が子どもにおよぼす影響』が発表されたのは、1996年のこと。この問題に関する初の包括的調査で、国連の報告書としては、これまでになく衝撃的な内容だった。過去10年間で、殺された子どもは200万人、負傷した子どもは600万人。若者たちは「最低限の基本的人権も認められない、みじめなモラルの空白地帯」に暮らしている。

南アフリカのネルソン・マンデラ前大統領夫人のマシエルによれば、報告書の発表後、改善もあったが、アフリカでは「非常に深刻な人間の価値の崩壊」が続いている。それを食い止めるには、政府と社会の両方が、問題への取り組み方を大きく変える必要がある。

マシエル夫人は、戦争、難民、子どもの被災者など、世界の一部地域の全般的状況は「良い方向に向かっていますが、残念ながら私たちの大陸は違います」と述べ、アンゴラ、コンゴ、エチオピア、エリトリアなど大陸全土で続く、あるいは新たに起きた紛争を指摘した。

「本当に重大な問題は、人間の価値が大きく崩壊している傾向」だと、マシエル夫人は言う。暴力と悲劇の鎖を断ち切るには、「市民社会がもっと積極的になる必要があります。私たちはもっと大きな声で発言しなくてはなりません。何かが始まるのを待っているのはダメ。もう沢山だ、と言うべきなのです。」

政府やアフリカの指導者たち、国際機



UNICEF / HQP5-0994 / R. GROSSMAN

リベリア難民と話すグラサ・マシエル（ケネマ・キャンプ）

関も変わらなくてはならない。「(子どもや難民を助ける)決議は、もう十分にあります。いま必要なのは、そうした決議を実行に移すこと。政府は集まって話し合いはしますが、(暴力をふるう連中を)罰しません。そんな活動はやめさせなくては、これは政治的意思の問題で、政府が望めば、決めたことを実行する方法はいつでも見つかるはずですよ。自分の妻や子どもは難民には決してならない指導者たちが、他人の権利を尊重するのを学ぶのも大切な。

標的にされて

女性や子どもは、いまも標的にされているが、対策も取られつつある。前夫がモザンビークの大統領だったマシエル夫人によれば、近年のモザンビーク内戦でも、少年兵問題がみられた。しかし政府などの機関は、紛争後なんの対策も取らなかった。

運良く、「私たちの家族やコミュニテ

ィは、他とはちがう対応をしました。元少年兵の帰宅は歓迎され、彼らも溶け込み、良い結果をもたらされた。今後は、元少年兵や孤児たちのリハビリを「公共施設ではなく、家庭やコミュニティでやっていくべきです。」

難民問題全般では、他にも改善があるという。「キャンプでのレイプ問題は、5年前ならあまり問題にされなかったでしょう。でも今は、キャンプに行く人なら誰でもこの問題を知っています」。難民保護のため、全体的な配慮が増したし、もっとも弱い立場にある人のための計画も増えた。難民自身も、再び社会の役に立つ市民になろうという意識が高まっている。

しかしマシエル夫人は、報告書を作る時に見た子どもたちの姿を忘れられない。「あの子どもたちの目、無力感、不安と混乱。彼らは何が起きているのか理解できなかったのです……きっと一生忘れられないでしょう。」■



UNHCR / E. WILKINSON

タンザニアから帰還途中のブルンジ難民（国境の受け入れセンターで）

かすかな希望の光

アフリカ中部では紛争が続いているが、ブルンジに明るい兆しが出てきた。

週に一度、アフリカ中部のサバンナを、政府職員と警備員の一同に護衛されたトラック隊が、ガタガタと音を立てて横切っていく。

乗客は、殺風景な国境の検問所で車を降るされ、カバンの中身を丹念に調べられ、全員の名前が登録される。武装兵が新たな帰還民を用心深く監視し、援助職員は兵士たちを監視する。しかし今日は雰囲気も和やかで、帰還民たちは何年かぶりに丘の斜面に建つ自宅に帰っていった。

毎週行なわれるこの「儀式」に参加する帰還民は、まだわずかだ（数十人から場合によっては数百人）。しかしアフリカの難民危機でもっとも長く残酷な事件のひとつであるブルンジ情勢で、帰還は少なくとも小さな希望の光だ。

内陸の国ブルンジは、1962年の独立以来、戦争と混乱に引き裂かれてきた。多数派のフツ系住民と少数派のツチ系住民の争いで数十万人が殺され、数百万人が

故郷を追われた。ツチが支配する軍部とフツの反政府勢力の対立は続き、過去5年間で死者は推定15万人、難民（主にタンザニアに避難）は約30万人にのぼる。

ブルンジ危機は、隣国ルワンダで起きたジェノサイド（民族大量虐殺）の影で何年も忘れられてきた。しかし最近、わずかながら明るい兆しが出てきた。

1996年にブヨヤ元大統領がクーデターで政権を奪って以来、ブルンジは経済制裁を受けてきたが、近隣諸国は今年初めにこれを解除。ここ数か月は、政府と反政府勢力、近隣諸国、それにUNHCRなどの機関を交じえた話し合いも開かれている。

政府関係者は、全難民の即時帰還を歓迎すると言うが、UNHCRは今年の帰還民数を5万人と控え目にみている。しかしこの数字も「楽観的だ」と考える職員は多い。

最悪の事態は回避したものの、情勢はまだ不安定だ。ブルンジは世界最貧国のひとつ。多くの人々は子どもを学校にやる金もないし、身分証明書を買う余裕もない。

手のほどこしようがない状況に、抛出国も援助を渋っている。UNHCRは資金不足で職員を減らし、再定着計画の大部分を中止せざるをえなくなった。

多くの地域では治安も良くなってきたが、決して戦争が遠のいたわけではない。反政府勢力も活発だ。首都ブジュンブラを見下ろす丘陵地帯でも、経済格差は鮮明だ。快適な植民地風の住居が建ちならぶ地区の向こうには、戦闘の被災民であふれる貧民街が広がっている。

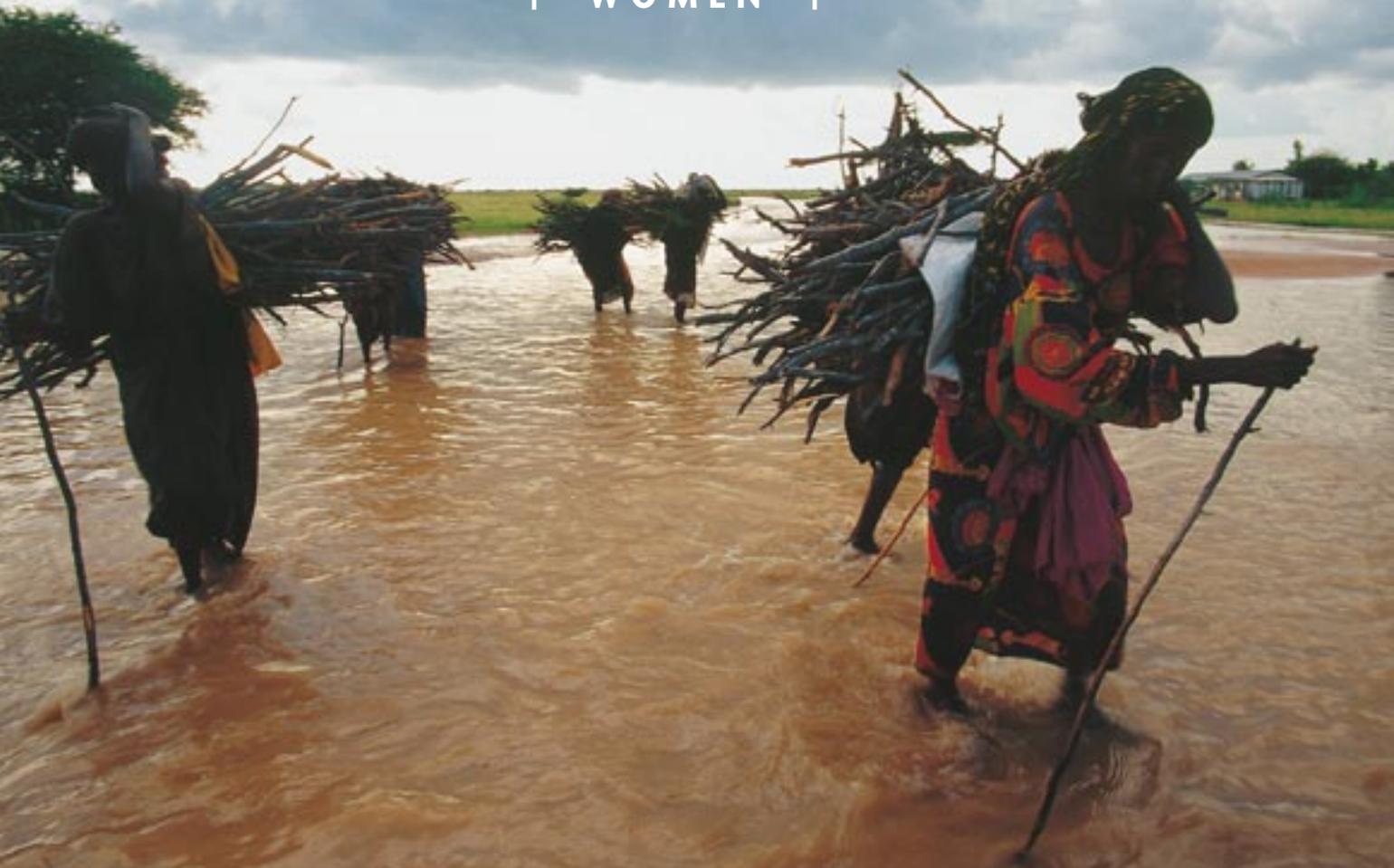
紛争当事者の話し合いは続いているが、フツの指導者は最近こう語った。「ブルンジ国民は、ともに笑い、食事もできるが、その後には殺しあう。それがわれわれのやり方だ。」

ブルンジは、大陸でもっとも危険で混乱したアフリカ中部に位置しており、周辺の情勢にも大きく左右される。隣国コンゴでは数か月にわたり、少なくとも9

つの勢力が衝突し、大量の難民がザンビアとタンザニアに流出した。ルワンダでジェノサイドの発端を作ったフツ系民兵の殺人集団インテラハムウェ（後に「死の天使」とも呼ばれた）の残党は、ルワンダとコンゴだけでなく、ウガンダでも旅行者を襲っている。アフリカ屈指の広い国土をもつアンゴラは、再び大規模な戦闘の舞台となり、少なくとも150万人が避難した。

ある援助職員は言う。「テレビカメラは去ったが、悪夢がアフリカ中部にもどってきた。」 ■

あるフツの指導者は言う。「ブルンジの人間は、ともに笑い、食事もできるが、その後には殺しあう。それがわれわれのやり方だ。」



たきぎを背負うソマリア難民女性（ケニアのダダーブ・キャンプ）

UNHCR / C. SHIRLEY

「死ぬまで黙っているつもりです...」

難民女性の生活に変化が起きているが、女性ゆえのニーズにもっと目を向けていく必要がある。

マリー＝アン・フィッツジェラルド

マアリーは若くて美しく、妻として愛され、子どもを溺愛している。しかしその暮らしには全く喜びがない。不安におびえ、家事にも専念できない。夜も眠れず、暗闇からパタパタというサンダルの足音が近づいてくるのでは、と怯えている。彼女の穏やかだった生活には、誘拐され、見ず知らずの男と結婚させられる恐怖が影を落としている。

悩みの原因は、マアリーの兄がもってきた。兄は隣国スーダンから歩いてきて、マアリーが暮らすカクマ難民キャンプ（ケニア南部）の近くに野宿を始めた。

たいていの文化では、兄弟姉妹の再会は喜びにあふれているが、ディンカ出身のマアリーにとって、幼いときに離ればなれになったきりの兄の出現は、恐怖を意味する。

マアリーの夫は、結婚の引き換えに牛

強制的な結婚を

目的とする

女性、子ども、

少女の誘拐は、

性的な暴行事件の

大多数を占める。

を贈る約束をした。その約束を果たせなかったのだから、もうマアリーを「所有する」権利はない。兄はこう言うのだ。マアリーと夫は、スーダン内戦を逃れる途中に同国南部で結婚。まもなくカクマ・キャンプに落ち着いた。そこでは家畜の所有が禁止されていたから、夫は約束を果たせないのだ。

8年がたち、兄は牛50頭を用意できるスーダン南部の男と結婚するよう、マアリーに迫っている。マアリーが拒絶すると兄は怒り、夫を殺すと脅した。もっと悪いことに、幼い息子と娘、それに乳飲み子の3人を取り上げると言う。

しかしマアリーの苦悩は、カクマでは全く珍しくない。ここでは強制結婚を目的とする女性や少年少女の誘拐が日常茶飯事なのだ。厳しい父性文化のディンカ



ソマリア難民の女性（ケニア）

UNHCR / B. PRESS

キャンプでは、12～49歳のブルンジ女性の26%が、難民になってからレイプされた。その多くは、以前にもレイプなど特定民族に向けられた暴力を経験している。

女性を保護する

こうした統計は、なかなか手に入らない。その背景には、難民女性に対する暴力への無関心がある。しかしUNHCRの任務の中核は保護、すなわち肉体的暴行からの保護だ。人道援助の世界全体も、最近やっと女性特有の問題を認め、行動を起こし始めた。

1988年、ユージーン・ドゥーイ副高等弁務官（当時）は、女性問題への取り組み改善を訴えた。翌年、アン・ハワース＝ワイルスがUNHCR初の難民女性調整官に任命された。「女性を無視するつもりは決してありませんでしたが、私たちは、男性しかいない難民委員会から情報を得ていました」と彼女は当時を振り返る。

ハワース＝ワイルスの初期の功績に、『1991年難民女性保護のためのガイドライン』がある。身体的な安全から、危機のなかにある女性への細やかな心遣いまで、援助職員に幅広い手がかりをマニュアル式で提供したものだ。

これをベースに、従来見過ごされてきた側面が細かく調査された。キャンプの設計が見直され、トイレや給水所は難民の住居の近くに設置され、暗くなった後も女性が頻繁に通る場所には外灯が置かれた。こうした措置には、明白な（また明白でない）治安上の危険を取りのぞく意図がある。あるコートジボワールのキャンプでは、女性は羞恥心から、男性用トイレの隣にある女性用トイレを使わず、森の中で用を足していて襲撃の危険にさらされていた。

ガイドラインは、医療スタッフと治安担当者（地元警察官を含む）への女性の参加・起用をすすめている。文化的なタブー意識から、女性は自分の問題を男性と話し合えず、性的暴行を受けても報告で

では、女性は物と交換される奴隷にすぎない。長老に不満を言えば、村八分にされ、保護を求めても無視される。

完全に無力

「私たちは完全に無力です。両親を失い、家族を失い、ひとりぼっちです」と言うのは、6人の娘をかかえるエリザベスだ。彼女の17歳になる長女も、8か月前、通学路で待ち伏せしていた男たちに連れ去られ、スーダンで見知らぬ男と結婚させられそうになった。

エリザベスとメアリーの二人にとって、キャンプにいる非政府機関（NGO）の職員が頼みの綱だ。しかしその職員も、彼女たちの事情をUNHCRの保護官に知らせる以外、手の打ちようがない。そして保護官も任務にしばられ、犯罪予防の難しさに悩んでいる。

しかし無力なのは、メアリーとエリザベスだけではない。アフリカ難民の80%は女性と子どもで、夫や父親は死んだか戦闘にとられている。彼女たちは例外な

く、帰属社会では差別的慣習にしばられ、難民になれば、レイプなどの問題でもっとも弱い立場に置かれる。

夫の死後、生き残った兄弟に娶られる侮辱を受ける女性もいる。女性器切除の慣習によって、重い病気を長くわずらう人も多い。窮屈な生活が原因で起きる家庭内暴力に、毎日怯えて暮らす人もいる。難民の家族に世話になっている少女たちが、性的暴行を受けるケースも少なくない。孤児になったり家族と生き別れにな

アフリカ難民女性が受ける

さまざまな形の暴力には

あまり関心が払われてこなかった。

った彼女たちは、自分を守ってくれる伝統的な制度を奪われ、どこに助けを求めたいかわからない。

紛争や避難のさなかでレイプされた女性たちが、避難先でもまったく同じ肉体的苦痛や恥辱感、罪悪感を経験する例は非常に多い。タンザニアのカネンブワ・

きない状況が続いているからだ。

ガイドラインの効果

ガイドラインの効果は、2年後、ケニア北部のダダーブ難民キャンプで発揮された。同キャンプでは、レイブ事件の発生率が高いと報告されていた。自国の混乱を逃れてきたソマリア女性たちは、たきぎを集めにキャンプを離れると、しばしば輪姦され、銃で撃たれたり、ナイフで切りつけられたり、殴られたり、強盗にあったりした。被害者には10歳の少女もいた。犯人は地元のならず者だが、ソマリア国境を越えてきた民兵だったり、ソマリア難民自身の場合もあった。

1993年、「暴力の女性犠牲者のプログラム」が始まった。きっかけは、6か月間のレイブ発生件数が192件、つまり毎日レイブが起きているという調査結果だった。ただしUNHCR職員は、実際のレイブ事件は報告より10倍多いとみていた。

キャンプの周囲に有刺鉄線が設けられ、トレーニングや装備増強によって警察が強化された。カウンセリングや医療の支援制度も導入された。被害者の家族、とくに夫たちがカウンセリングを受けた。ソマリアの文化では、ふつうレイブの被害者は姦通の烙印を押され、離婚されてしまうのだ。

この結果、性的暴行事件は激減したが、プログラムは予算上の理由で中止された。1998年初め、性的暴行事件は再び増加に転じたが、同年8月に米国議会が拠出した150万ドルでたきぎが購入・無料配布



スパゲティの作り方を習う難民女性（ケニアのイフォ・キャンプ）

昔ながらの
考えと、
女性の権利を
守るために
最近公布された
国際条約の間の
溝は深い。

されると、レイブの発生率はひとケタまで減った。今年、ダダーブなどの「暴力の女性犠牲者プロジェクト」は、米国のターナー財団から165万ドルの寄付を受ける予定だ。そして性差への認識を高め、

収入創出活動を促進し、キャンプの治安を改善し、精神的な傷を負った女性に医療援助とカウンセリングを行なう。

着々と進展はあるものの、その速度は決して速くない。昔ながらの考え方で、女性の権利を守るために最近公布された国際条約との間の溝は深い。難民女性は、いまだに自分

のコミュニティの事柄に発言権をもっていない。そして多くの場合、男性はそのほうが都合がいいと感じている。

互いに手を結んで

メアリーとエリザベスは、地元の女性

支援団体のメンバーだ。ダダーブの女性たちも、反レイブ委員会に参加している。タンザニアでは、暴力をふるわれた妻たちが「駆け込みセンター」で慰めあう。いずれも暴力と迫害の予防を話し合う大事な場所だが、何の権限もないし、影響力もほとんどない。女性の地位を大きく変えるには、難民社会の運営を取り仕切る行政委員会に、女性が立候補できるようになる必要があるだろう。

UNHCRなど難民と一緒に活動する人道機関の職員のなかにも、変化への抵抗はある。組織内を調査した人権専門家ロバート・コーエンは、多くの職員が難民間のレイブ事件を残念だと思っているが、仕方のないことで、「政策を唱えるだけでは不十分」と考えているとの結論に達した。

裁判所にもちこめるほど十分な証拠が揃っていないレイブ事件はわずかで、裁判になっても正義が追求されるとは限らない。おびただしい数の難民が重荷の庇護国政府は、難民キャンプでの犯罪取り締まりに熱心とは言いがたい。レイブ事件で有罪判決が下されることはまずない。

殺人も誘拐も、脅しを含む事件の立証は困難なものだが、法律の文言を超えた保護が与えられるべきだろう。女性や少女には、帰属する社会に関係なく普遍的な権利があり、性的迫害から解放されるよう、権利が尊重されねばならない。

最近、UNHCRとパートナーのNGO主催のプログラムで、アフリカの難民女性たちは活動の必要性を強く認識するようになった。エリザベスは言う。「スーダンでは、私たちは死ぬまで沈黙を守ります。(でも)いまはここにて、私たちの文化を変えたいと考えているのです。」■

メアリー＝アン・フィッツジェラルドは、ワシントンに拠点を置く人権擁護団体「Refugees International」のアフリカ代表。

フィールド職員は...

過酷で孤独な仕事だが、やりがいも大きい。

混乱、苦難、常に存在する暴力の恐怖に対処するのは難しいが、リズ・アフアにとって一番つらいのは孤独だった。

「一人ぼっちになったのは生まれて初めてでした」とリズ。感情豊かなナイジェリア人で、4人の子どもの母親だが、地方の孤独な事務所へ送られたときは「毎晩泣いていました」。彼女は「あまりにもさびしくて本も読めなかった」が、テープレコーダーと、ニール・ダイヤモンドとゴスペル・ソング(アフリカ系米国人の宗教音楽)が入ったテープを手に入れた。「その音楽が私を救ってくれました。」

リズは、ブルンジの奥地ルイギにある小さなUNHCR事務所で、1年間責任者を

務めた。そこで仲間のカビ・ベルナンデルをはじめ13人の現地職員と、隣国タンザニアにいるブルンジ難民の帰還を助け、帰還後の暮らしをモニタリングした。

ルイギと同様の「前線」事務所は世界中にあり、危険な地域にある場合も多い。そこは危機を逃れてきたり、人生の再出発をすべく故郷へ帰ってきた大勢の難民と人道機関の最初の接点として、UNHCRの活動の目となり耳となる。

援助職員にとっては、孤独、退屈、距離、危険のすべてを伴う、もっとも過酷な任務のひとつだが、こうした場所で活動す

る者はみな、特別な充実感と達成感があると声をそろえる。

リズは、1990年代半ばにジンバブエから帰還するモザンビーク難民を支援し、95~96年にはアフリカ大湖地域の難民を支援。そこでフィールドでの任務に「魅了」された。

最悪の経験

フィールド職員としての最悪の経験は、旧ザイールのティンギティンギ・キャンプだった。そこにはルワンダ難民とインテラハムウェ(フツ系民兵)が集まっていた。

キャンプにフィールド職員用の食糧がなくなり、リズは調達

のためキサンガニの町に送られた。しかし彼女が戻ったとき、仲間はゲリラに脅されてキャンプから撤退していた。再び仲間に合流できたのは、数日後だった。

ブルンジの国内情勢は厳しい。何十年も崩壊状態だし、内戦で過去5年間に推定15万人以上が命を落とした。数十万人が国内避難民となり、27万人がタンザニアで難民生活を送っている。

このうちわずかな数が、この数か月に帰国しはじめた。UNHCRは彼らの帰還を助けるため、週1便の護衛トラック団を組織した。これまでの帰還民は、暴行や略奪、殺害の危険と隣り合わせだった。

ニール・ダイヤモンドとゴスペルのテープが「私を救ってくれました。」

政府の希望どおり、今年帰還

民が増えれば、ルイギのような前線事務所は帰還活動で大事な役割を果たすだろう。

ブルンジは違う

フィールド職員は、援助を受ける人々と緊密な関係を築くものだ。しかしリズによれば、ブルンジの状況は大きく違う。

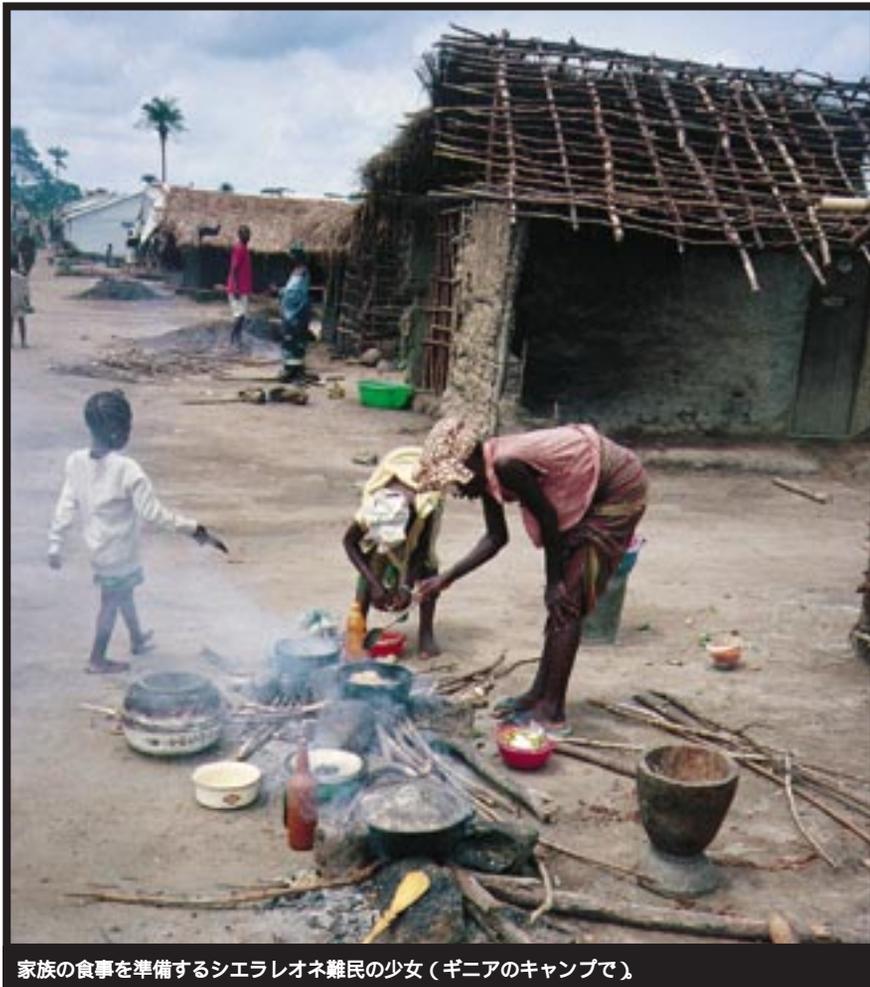
「私たちは人々を物質面で助けますが、心には触れられません」とリズ。「アフリカの他の場所とはずいぶん違います。モザンビークでは、人々は故郷に帰ると地面にキスして、とても喜んでいました。ここでは なにもありません。ただビニールシートと種子を手渡すだけなんて私はいやです。彼らの心にも触れたいのです。」

こうした任務は、既婚者・独身者を問わず、あらゆる職員に大きな犠牲を強いる。リズの家族はケニアの首都ナイロビに住んでいる。頻繁に会ってはいるが、「最初の日、3人娘と1人息子は『ママ、ママ』と飛びついてきます。でも2日目になると、彼らは『何日かしたら、ママはまたどこかへ行ってしまおう』と、自分の世界に閉じこもってしまいます。」

「私は仕事を愛していますが、これは大きな代償です。」■



ティンギティンギ・キャンプのリズ・アフア (1996年)



家族の食事を準備するシエラレオネ難民の少女（ギニアのキャンプで）

バナナを毎日探し回らなければいけないのだ。しかし何より驚くべきは、アフリカの難民数百万人の間では、そんな境遇は珍しくないということだ。

おそろべき「歪み」

アフリカの難民問題には、おそろべき「歪み」がある。アフリカ諸国は、長年にわたり他の国々が恥じ入るほど寛容に、大勢の難民を迎え入れてきた。しかし受け入れ国自身が非常に貧しく、また難民の数があまりに多く、その多くが長年滞在するため、その生活環境は目を覆う状況になってしまった。

2年前のある朝、裕福なフィンダの家族（父親はココア農園とパーム油の精製所をもっていた）に、突然災難が振りかかってきた。シエラレオネの反政府勢力が一家を襲撃したのだ。さいわい子どもたちは近所の小川に行っていたが、兵士たちは母親の手足を切って惨殺。父親も行方不明になった。おそらく誘拐され、殺されたのだろう。フィンダはほとんど本能的に、家族全員を7日間歩かせて、隣国ギニアの比較的安全な場所に来た。

コンバという名の弟は、なんとか脱出できたものの、肺炎にかかって難民キャンプで死んだ。ジュニアは乳飲み子だったが、フィンダが避難する道すがら熟したバナナなどを与えた。バナナとわずかな米、少量の野菜が一家の主な食料だ。

一日数十円で

たきぎ拾いと水汲みのほかに、フィンダは農作業を手伝ったり、市のたつ日に商人を手伝って、1日40円ほど手に入れる。弟や妹はなんとか難民学校に入れてやれたが、自分が本を読む時間はない。

父親が現れない限り、フィンダは一家を引き取ってくれる家族を探さなければならぬだろう。その一方で、彼女は自分の生活を一生支えられる技能を学ぶ必要があると感じている。しかし起きている時間すべてを、生き延びるために費やしている現実を考えると、それは容易ではない。■

おさない難民たち

彼女は一日中、たきぎ拾いをし、水汲みをし、レイプにおびえ、家族5人の面倒をみている。

14歳のフィンダは、5人の家族のために、1日3回、毎日休むことなく5km歩いて水汲みに行く。一家が洗濯や料理に使える水は厳しく制限されている。先進国の一般家庭で、シャワーをほんの1分浴びる程度の量だろう。

フィンダはまた、週4回朝5時に起きて家の半径8kmでたきぎを探し、10kgを背負って家に帰る。10歳の弟アイアが手伝ってくれることもある。たきぎ拾いに行く場所と時間には十分注意しなくてはならない。たきぎを探す女たちは、レイプ犯の格好の標的になるからだ。

まだ十代でもフィンダは家長として、たきぎ拾いや水汲みだけでなく、アイアと4歳の妹カディアツ、2歳の弟ジュニア、それに一緒に暮らす老女二人のために、食糧を調達して、養わなくてはならない。みな残虐なシエラレオネ内戦を逃れてきた難民で、隣国ギニアのコウンドウ・レンゴ・ベンゴ・キャンプIIIというキャンプで暮らしている。

たしかにフィンダの身の上には胸が痛む。まだ年端もいかない少女が、自分よりもっと不運な5人のために、最低限の生活必需品、水、たきぎ、わずかな米や

ケニア警察とUNHCRは、数人の死者を出した同国のカクマ難民キャンプの情勢不安を受けて、治安強化策を検討している。

ギニアビサウではこの夏、内戦を逃れた難民の帰還を待って、総選挙が行なわれる予定だ。

庇護を求めて

米国

借金を帳消しに

クリントン米大統領は、アフリカの最貧国の債務約700億ドルの免除を提案した。「言葉だけでなく、やるべきことを実行しよう」と、同大統領は最近、アフリカ政府関係者たちに話した。「改革の努力をしている国が国民の『基本的ニーズ』に対応できるよう、債務を軽減する必要がある」。専門家たちは、未来の難民危機を食い止める最良の方法は、最貧国の長期的な開発を進めることで、その第一歩が第三世界に対する莫大な債務免除だとしている。

ザンビア

難民の新たな波

政情不安と戦闘で、コンゴ民主共和国からの避難民が増えつづけるなか、隣国ザンビアには近年で最大規模の難民が流入している。わずか数週間で入国者は2万8000人に達した。このうち数百人は、1998年8月に起きた戦闘を逃れてきた政府軍の兵士たちだ。

ボツワナ

UNHCRが事務所を再開

UNHCRは今年に入って、ボツワナの首都ハボローネの事務所を再開した。隣国ナミビアから数千人が庇護を求めてやってきたためだ。UNHCRは、アフリカ南部情勢が落ち着いた1998年にハボローネ事務所を閉鎖していた。しかし昨年10月、ナミビア北東部のカプリビ地方にいた分離派組織と結びついたナミビア人たちが、国境を越えて流入し始めた。

国連

危機の本当の原因

国連の報告書によると、政治権力や富を少数の指導者に集中させる政策は、大きな人道危機の原因になりやすい。国連大学の世界開発経済研究所の調査によると、環境の悪化は経済難の原因になりやすいが、大規模な人道上の災害は、多くの場合、人災だという。

「非常に明白なことがある」と言うのは、調査に参加したライモ・バイリネンだ。「人道

上の緊急事態は、民主主義国では起きず、一党独裁または軍事政権の国でもっとも起きやすい。また、危機が一番起きやすいのは、単独集団が国の富を握り、収入格差が最大の時だという。多くの場合、人道上の災害を引き起こす最初の紛争は「指導者の私的な蓄財の手段として始められ、民族性やイデオロギーが国民の支持を得る道具にされている。」

ケニア

奴隷貿易の子孫たち

1800年代の数十年前、武装したアラブの襲撃団が、アフリカの東部と中部で組織的な奴隷狩りを繰り返した。無数のアフリカ人がムチ打たれ、手足をつながれ、悪名高いザンジバルの奴隷市場に引き出され、遠くはアラビア湾岸諸国まで、近くはソマリア沿岸に連れて行かれた。近年のソマリアの混乱で、こうした奴隷の子孫も近隣諸国に逃れた。

彼らは「ムシュングリス」と呼ばれ、現在、推定1万人がケニアのダダーブ・キャンプで暮らしている。彼らと、現在タンザニアとモザンビークに暮らす人々の間には、明らかに文化的なつながりがある。100歳を越えているというある難民は、今もモザンビークのニアッサ地方で話されているヤオ語を話す。

踊り、狩猟、収穫、割礼、宗教的儀式にも文化的な類似性がある。

ムシュングリスの運命は、法的、倫理的、現実的な問題を投げかけた。過去200年間、アフリカをはじめ世界の無数の人々が、紛争や自然災害で故郷を追われてきた。一部は新しい「故郷」に同化した。多くは社会の底辺に押しやられた。彼らは今、先祖の遺産について何を要求できるのか。こうした問題に現実的な解決策はあるのか。ムシュングリスは、ソマリアとモザンビークには決して帰らないと言い、今のところ両国に移住する提案にも同意していない。しかしこの長い苦難を解決する別の方法もある 第三国定住である。

第三国定住

長期的に安全な場所を見つける必要のあるアフリカ難民のために、新たな扉が開きはじめた。故郷を逃れてきたが、さまざまな理由から帰国できず、第三国を探さなければならぬ人々に、ベニンとブル

キナファソがアフリカで初めて一定の土地を提供。フィンランドやノルウェーなど従来から第三国定住者を受け入れている国も、年間の難民受け入れ数を増やした。米国、カナダ、オーストラリアも、ア

フリカ人の受け入れ数を拡大し、米国の統計で1997～98年に7000人から1万2000人に増えた。UNHCR主導のもと世界で第三国定住した難民の約3分の1がアフリカ人である。

コンゴ民主共和国の反政府勢力は、戦闘に参加している少年兵を排除させるため国連と協力すると表明。

アナン国連事務総長は、ルワンダのジェノサイドにおける国連の活動に対する批判を受け、独自調査を実施する予定。

アンゴラにおける避難民の数が昨年65万人急増し、計150万人に。

エチオピア

帰還再開をめざして

長くエチオピアにいるソマリア難民の帰還は、今年後半に再開が期待されている。おびたしい数のソマリア人が



自発的帰還の登録手続きをするソマリア難民（エチオピアのハルチシェイク・キャンプ）。

が、まず1970年代後半のオガデン紛争で、その後1991年のソマリア内戦で母国を逃れてきた。1997年にスタートした帰還計画では、推定6万人が帰還したが、国内の経済難を理由に、昨年末に一時停止された。

大きな問題のひとつに、サウジアラビアが家畜の伝染病を理由に、ソマリア最大の収入源である牛、ラクダ、羊を全面禁輸したことがある。エチオピア南東部には、いまま推定19万3000人の難民がおり、長雨が途切れ次第、帰還が再開される見込みだ。UNHCRは帰還民の受け入れに備えて、ソマリアでの即効プロジェクト(QIPs)に約2000万ドルを投じ、学校、病院、給水施設を再建している。

庇護を求めて

ナイジェリア

帰還の 때가きた？

アフリカ最大の人口国ナイジェリアは、軍事政権時代に300~400万人が母国を逃れた。しかし最近、文民政権にもどり、平和的な移行がなされているから、多くが故郷に帰れるはずだ。「状況が変われば、ナイジェリア人は説得されなくても帰る」と、ナイジェリアの文民支配への復帰を監視してきた「移行中の国」という機関のトップ、イグニシウス・オゾイロは言う。

チャド

移動するスーダン人

スーダン市民数千人が、西ダルフール地方での戦闘再開を逃れてチャドにやってきた。昨年も同様の状況のなか、スーダン人推定8500人がエル・ジェネイナを逃れてきて、大部分がいまもにスーダン国境沿いのチャドの町アドレ近郊に暮らしている。

世界

地雷の法的禁止

対人地雷禁止条約が3月に施行された。同条約は、1997年12月に調印手続きがはじまり、これまでに130か国・政府が調印、65か国が国内法として批准した。しかし同条約が世界的に効力を発揮するまでには、依然として多くの困難がある。

ロシアと中国は調印しておらず、米国もクリントン大統領は承認したものの、議会は、韓国で自国軍を守るには地雷が必要かもしれないと、応じる様子はない。いまま地雷による犠牲者は毎年数万人にのぼり、その多くがアフリカで被害にあっている。

南アフリカ

高まる外国人排斥ムード

南アフリカ共和国で外国人排斥の風潮が高まるなか、難民と庇護希望者が真っ先に標的にされている。UNHCRはこの問題を「駆逐」するため、南ア人権委員会および全国難民問題協会と協力して全国キャンペーンを開始。南ア民主主義研究所の調査によると、国民の45%は外国人入国の厳しい制限を求めており、25%は完全な入国禁止を求めている。しかし回答者の80%は、外国人とほとんど接触したことがない。

政治評論家のビンセント・

ウィリアムズは、最近のインタビューで、「南ア人の大部分は、外国人は悪者だと思っている」と語った。キャンペーンのチラシは、「警察など当局の有効な保護がなければ、外国人排斥は難民の権利、生計、まともな生活を脅かし、難民保護のシステムを危うくする訴えている。また、宗教団体、NGO、マスコミ、労働組合、政府職員に、難民の問題と権利にもっと「敏感に」なるよう促している。

南アには250~430万人の不法移民がおり、昨年帰還また

は国外退去処分になった人は18万人以上。UNHCRは、難民が生まれる背景や事情を説明した『難民の話しよう』をはじめ多くの教育冊子を発行してきた。ラジオでも『難民の話しよう』の第一シリーズが放送され、ナイジェリア人作家コール・オモトソは『出発の後』、『到着することなく』、『戦争地帯に追い込まれた一家の苦難』、『安全への逃避を試みて』などのラジオ劇を制作した。

スーダンの苦悩



これはアフリカでも長く続いている悲劇のひとつである。数十年にわたり、スーダン南部は絶え間ない戦争、人災、天災に見舞われ、荒廃してきた。おびたしい数の人々が家や土地を失い、多くは何年も地方をさまよひ、近隣諸国に庇護を求めた。命を落とした人は数え切れない。UNHCRは、ウガンダ、エチオピア、ケニア、コンゴ民主共和国で30万人以上のスーダン難民を支援している。

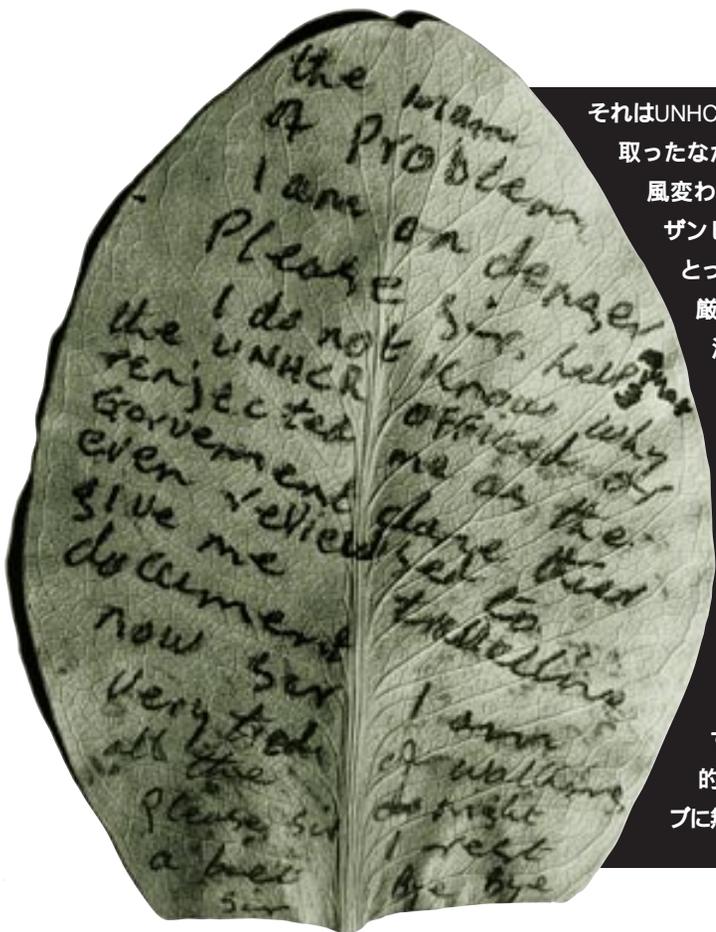
スーダン南部に生きる人々の窮乏を、スイス人写真家オリビエ・ボジェルソンが撮った。





ALL PHOTOS COPYRIGHT © VOGELANG





それはUNHCRがこれまで受け取ったなかでも、とりわけ風変わりな訴えだった。ザンビアにいる難民にとって、情勢は非常に厳しく、送り手は生活再建の手助けをUNHCRに求めている。実際、その難民はメッセージを落ち葉の両面に書くしかなかった。「この落ち葉の手紙に、皆さんが喜んでいただけたらと思います」という文は感動的だ。葉はジュネーブに無事届いた。

BBCとUNHCRが新番組

英国放送協会（BBC）ワールドサービスは、戦争で殺されたり、身体の一部を失ったり、故郷を追われた子ども数百万人の苦難について、新番組『紛争の子どもたち』をスタートさせた。

英語、スワヒリ語、ポルトガル語など9か国語で放送され、UNHCRと英外務省がそれぞれ情報と資金を提供。クック外相は、「紛争に巻き込まれた子どもたち自身の言葉は、政府、非政府機関、人々に、今すぐ対策をとらなければいけないと訴えかけるだろう」と述べた。

番組では、若者たちが自分の体験談を語る。マリアナ・アリ（16歳）は、民兵に誘拐され、1994年のルワンダの民族大量虐殺を目撃してきた。シエラレオネ出身の子どもは、幼児売春、少年兵、妹や弟のために家長となる子どもについて語った。■

バルクチャレンジ号の帰還

何年もアフリカ西部の海を往復してきた老朽貨物船バルク・チャレンジ号は、1996年、内戦を逃れる約2000人のリベリア人を乗せて出港した。しかし近隣諸国は10日間も寄港を拒否。船はどんどん沈み、食糧と飲料水も尽きようというとき、ガーナがやっと入港を認めた。最近も現役に復帰して、シエラレオネ内戦を逃れる多数のナイジェリア人を母国に運んだ。今回は入航を拒否する国はなかった。■

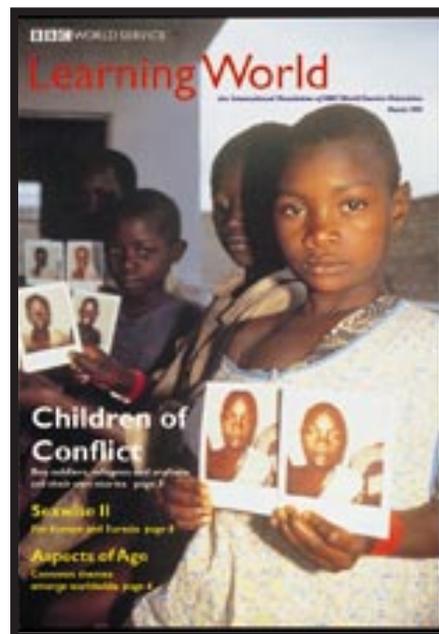
ぜんぶ読もう

アフリカ難民児童の苦境をテーマにした6冊シリーズの最初の3冊が、最近出版された。UNHCRと教科書のマクミラン社の共同事業で、英語版とフランス語版がある。このプロジェクトは「子どもたちが自分の言葉で話す試みだ」とUNHCR情報官のカッシム・ディアニュは言う。

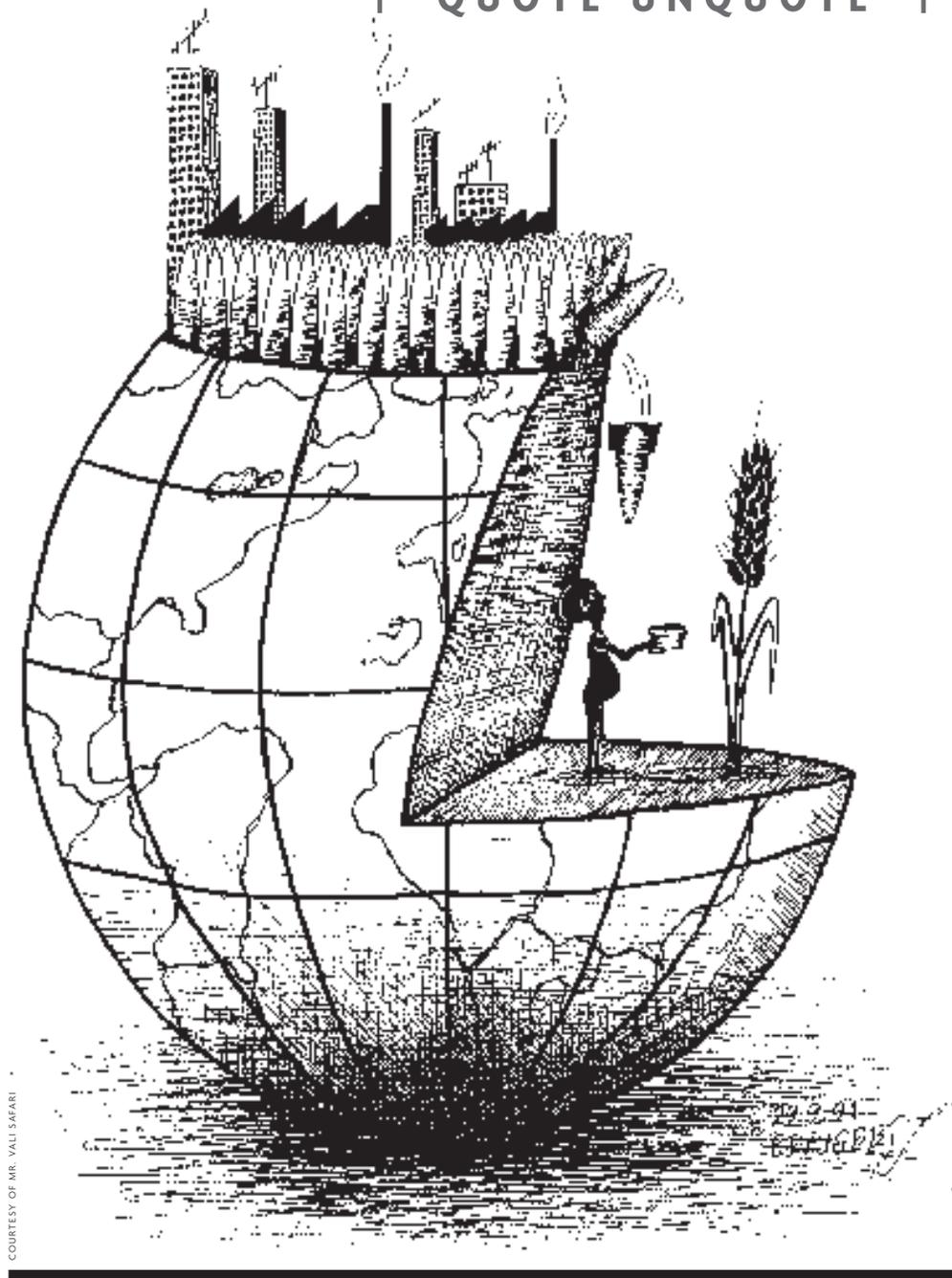
ナイロビでの英語版出版を記念して、地元の劇団が3冊中2冊の物語を上演。そのうちの1冊『失われた子どもたち』は、戦争で子どもが両親と離れ離れになる問題を扱っている。

『赤い影』は、難民が帰還し、戦後の生活再建で直面する困難の話。三冊目の『クライベイビー』は、庇護国で地元の子どもたちに差別され、仲間はずれにされる難民少女の物語だ。

次の三冊は、1999年半ばに出版される見込み。■



COPYRIGHT BBC



COURTESY OF MR. WALI SAFARI

国際社会は、難民に飽きてきた。
しかも、ここはコソボではなく、僻遠の地ですから。

UNHCRの緒方貞子高等弁務官（バルカン半島情勢にくらべて、アフリカ西部の難民危機に対する国際社会の無関心について）

「路上で7人の子どもが死んでいるのを見ました。血を流して、動物みたいに倒れていました。」

アンゴラで再開された戦闘の目撃者

「彼らは憎み合っているポーズをとっているが、ときにはとてもうまくやっている。」

ブルンジでフツとツチの対立解消をめざす協議の仲介者

「冷徹な愛」

援助の関係者の新たなキャッチフレーズ（危機に深入りしない慎重な様子を表現して）

「まだ市内に仲間がいる。親がベッドの下にかくまっているんだ。」

シエラレオネの少年兵（首都フリータウン攻防戦で他の若者たちの居場所について語って）

「ラジオをつければ世界中で起きていることが分かるのに、10キロ先の様子は見当もつかない。」

アフリカ東部の国エリトリアの住民（エリトリアと隣国エチオピア間で続く戦闘について）

「難民には、水も保健センターも学校も食糧もある。庇護国の国民には何も無い。反感を買わないか心配だ。」

ギニアのザイノウル・サノウッソ内相（ギニアはアフリカで最大の難民受け入れ国）

「なぜわれわれアフリカ人は殺し合うのか？ なすべきことは山ほどあるのに。」

コンゴ民主共和国のナンガ蔵相（同国では政情不安が続いている）

「人道援助は、紛争を根本的に解決する政治意思の欠如を見えないようにする“隠れみの”のようになされてきた。」

コフィ・アナン国連事務総長

